

e-ウォッチ

デフレ加速化のアクセル踏む野田内閣

TPP参加、消費税増税、原発再稼働…あちこちで迷走を繰り返す野田内閣が、国家公務員の採用を5割以上削減すると打ち出しました。

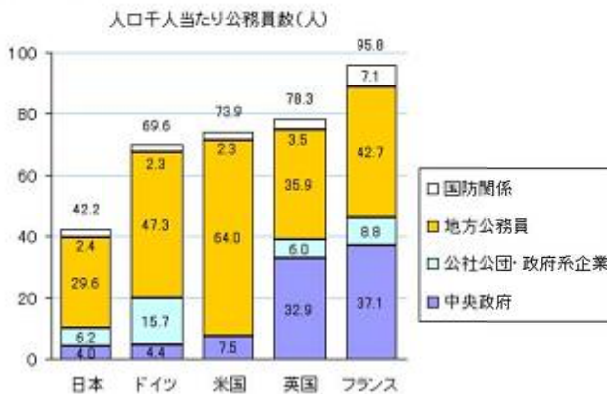
【日本の公務員は「多すぎ」で「高すぎ」か？】

なぜ、公務員採用の大幅削減か。ある新聞論説は、「消費税増税を…実現するための手段」「増税に向け都合のよい政策」と断じています。

では実際、日本の公務員の現状はどうか。自民党政権時代から“公務員天国”“大きな政府”など、以前から日本の公務員は「多すぎる」「給料が高すぎる」とやり玉に挙げられ、民主党も国家公務員の総人件費「2割削減」を公約に掲げてきましたが、実情はずいぶん違うようです。

どの国際比較調査でも、日本の公務員数もその人件費総額も最低ないし最低レベルです。野村総研の調査(下図・2005年)でも、日本の公務員数は先進国の半分程度しかありません。この点からみれば、すでに十分すぎるほど「小さな政府」なのです。

公務員数の国際比較



東京でもいよいよ開花宣言。本格的な春到来。(町田・薬師池公園)

【行政の機能不全や景気後退を加速化する危険】

むしろ今回の方針には、より深刻な危険が潜んでいるのではないのでしょうか。

新規採用を大幅に削減することで、組織の年齢構成のバランスが崩れ、後継者を育てるシステムが壊れ、個々の公務員への負荷増大で行政が機能不全に陥ることはないのか。長い「復興」の時代を乗り切るリーダーシップを果たせるのか。

また、抱き合わせで狙われている消費税増税による景気後退が懸念される中、政府が率先して雇用を悪化させれば、それは当然民間にも波及し、景気悪化を加速化させることにはならないでしょうか。

【雇用の向上と安定、国民消費拡大で需給ギャップ拡大を】

日本において、もう10年以上もデフレが続き、需要不足が慢性化しています。もともとこのデフレは、1997年の橋本内閣(当時)が「構造改革」の名で行った消費税増税と緊縮財政によって引き起こされ、それが小泉内閣や民主党政権に引き継がれてきた経過があります。「構造改革」によって生み出されたデフレは、「構造改革」の強化で解決できるはずはありません。野田内閣が狙う消費税増税や公務員採用の大幅削減は、デフレ加速化のプログラムであり、いっそうの産業空洞化、格差拡大、大量失業など、より深刻なデフレスパイラルを引き起こすだけでしかありません。

破たんが明白な「構造改革」路線に一刻も早く終止符を打ち、雇用の向上と安定、国民消費拡大で需給ギャップを解消するために必要な財政措置を講ずることこそ肝要です。

【春和景明】

◆子どもの頃、桜の季節になると家族そろってあるいは町内会で、毎年必ずお花見に出かけた記憶があり、子供心にワクワクした。◆春一番が吹かずじまいで本番を迎える今年の春。長く続いた冷たく寒く重い冬、東日本大震災から一年が過ぎたが、遅々として進まない復旧・復興、原発事故による限のない被害の広がりの中で進む再稼働への動き、東京電力による恫喝まがいの電気代値上げ、そして消費税の増税に「いのち」をかけるという野田総理。◆明るい話が一向に見えない閉塞感漂う日本列島にも、季節はめぐり桜前線上昇中。耐えて忍んで待ちわびた暖かく花咲く春がやっと来た。花粉症の人には申し訳ないが、私はいつもこの季節が待ち遠しい。明るい春の日差しと満開の桜、芽吹き新緑へと移り変わる生命力の強さと美しさに見とれるとき、自分もまた生きていることを実感する。

◆桜が咲いたら出かけよう！心を開放し、春のうららかな日差しを浴びて、ひと時を穏やかに過ごしたい。このニュースが届く頃はきっと関東にも開花宣言が出され、ささやかな楽しみにウキウキしていることだろう。…(広)

(しゅんわけいめい) 春の日の
おだやかで、光の明るいさま。

「学卒者の安定就業5割未満」に求められる支援策は

3月20日、「日経」1面に「大学・専門学校進学者、安定就業5割未満 内閣府推計 高校では3割程度 政府、6月めど支援対策」との見出しが躍りました。ショッキングに感じた方も多かったでしょう。しかし、こうした傾向はすでに数年来続いてきた傾向です。となると、今回の報道に「ことさらなぜ？」と首をかしげたくになります。

どうやら情報元の政府が強調したかったのは、「6月めど支援対策」の部分だったようです。

【これまでの施策の焼き直しでない対策が必要】

それにしても、雇用問題、とりわけ若年層の雇用についてはバブル崩壊以降、有効な対策が打たれて来なかっただけに、6月の支援対策の中身が気になります。

報道では、就職した企業とのミスマッチの問題や採用意欲のある中小企業とのマッチングの問題をあげていることから、これまでも実施してきたキャリアプログラムや、ハローワークを活用しての相談窓口の増強、合同会社説明会の回数増加などといったことが考えられます。

しかし、たとえばハローワークを通じての支援では、学卒者の利用者の少なさから、これまでも成果を上げているとは言い難いものがあります。

6月に発表される支援対策については、今までの施策の焼き直しの範囲にとどまらず、即効性のある対策と同時に長期的に見据えて有効な対策も期待したいところです。

【若年層に急増する非正規雇用、定着率の低さ】

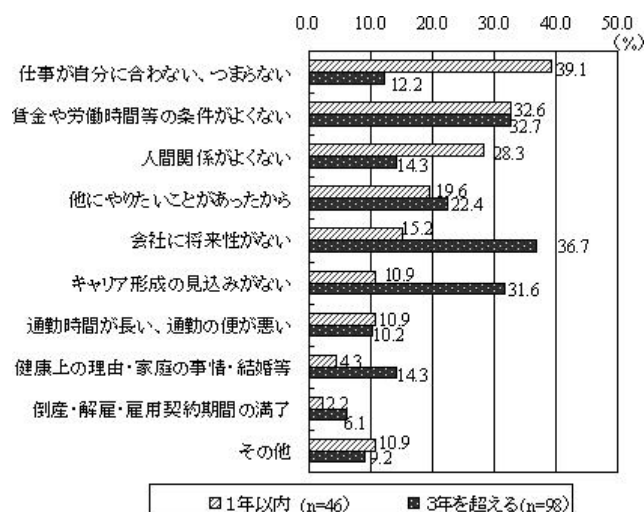
ところで、今回の内閣府調査では、2009年時の失業率は5.1%。ところが若年層(15～24歳)では9.1%です。平均の2倍近い失業率も気になりますが、就職活動でつまづいた若い人に多い「正社員になれないなら、とりあえずアルバイトか派遣」と、目的なく非正規雇用の状態で働き始める人が急激に増えていることも深刻です。1990年若年層の非正規労働者は9.4%だったものが2010年には30.7%と3倍以上にもなっています(総務省調査)。非正規雇用者の増加は、本人の問題だけにすまされない、日本社会全体に関わる大問題です。

また、離職率の高さや離職の理由も気になるところです。正社員が1年以内に離職する理由の第1位は、「仕事が自分に合わない」。そして「賃金や労働時間等の条件が良くない」「人間関係が良くない」「他にやりたいことがある」と続き、いわゆるミスマッチの問題が目立ちます。

一方、就職後3年を超えて離職する正社員の理由の第1位は「会社に将来性がない」で、「賃金や労働時間等の条件が良くない」「キャリア形成の見込みがない」「他にやりたいことがある」と続きます(厚労省調査)。

つまり、入社数年たってから辞める社員は、ミスマッチというよりも、会社の将来性や待遇に不満を持っており、それに起因していることが特徴です。

このように、若年層の間で広がる非正規雇用の増大や、せっかく就職したにもかかわらずに離職してしまう定着率の低さをどうするのか、こうした問題にもメスを入れるような支援策が必要です。



【求められる企業を「育てる」支援】

企業とのマッチングについては、できるだけ入社前に企業と求職者がお互いを理解することが理想ですが、現在は、就職活動があまりにも負担になり大学4年時の授業が成り立たないといった声まで聞こえる状況もあります。

学生は内定が取れないため、より多くの企業に応募しなければならず、エントリーシートの提出やインターンシップ、数次にわたる採用試験(面接)など、就活がエンドレス化しており、これ以上の負担増は弊害を生むだけです。

入口(就職時)のマッチングだけに焦点をあてた対策ではなく、むしろ雇用を増やす意味でも、新卒採用の経験がなく採用したくとも踏み出せない中小企業のハードルを下げる支援や、入社後の離職率を下げる(マッチングを高める)ような支援が必要ではないでしょうか。

たとえば、若年者の採用の未経験企業では、採用のために求人票はどうするのか、学校との対応はどうするのか、採用試験はどうすればよいのか、入社した後の教育はどうするのかなど、経験企業では何でもないことが、はじめての企業にとっては大問題です。これらのノウハウを普及することも大事な支援策です。

若者の採用では経営に一定の負荷は掛かりますが、それを契機に企業内に新たな風が吹き込まれ経営にプラスに働くことは多くの企業が実証しています。

同時に、就職した若者が会社の将来と自分の将来を重ね合わせて展望できるような魅力ある会社づくりへの支援も必要でしょう。経営の側からみれば、採用した若者が育ち、それが経営の発展につながるという絵を描くことです。このような企業を「育てる」支援が求められています。

大震災・原発事故から1年

“原発に頼らない日本”を模索する力

【日本のエネルギー政策をめぐる綱引き】

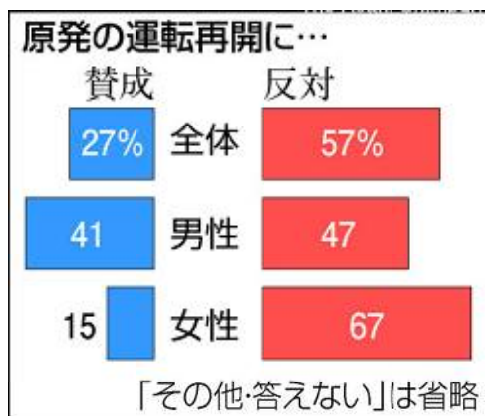
3月26日、柏崎刈羽原発6号機が定期検査で停止し、全国54基の原発は、泊原発3号機（5月停止予定）を除いてすべて停止しました。

しかし一方で、電力不足や電力料金の値上げ、ストレス等による「安全性」の強化などをもちだして、長期にわたって甚大な被害をもたらしている福島原発事故のまともな総括もないまま、原発再稼働を策する動きも強まっています。

マスコミ各社は3月、いっせいに世論調査を実施。たとえばNHKの調査では、原発事故への不安を感じている人は90%を越え、原発を「減らす」「廃止する」など、“原発に頼らない日本”を志向する人が71%に及んでいます。

「朝日」の調査では、原発の再開について「反対」57%、「賛成」27%となっています。

まさに、「原子カムラ」やそれを取り巻く政・財・官と国民世論との間で、日本の将来のエネルギー政策をめぐる激しい綱引きが続いています。



「朝日」世論調査より

【再生可能エネルギー実用化に向けたとくみ】

いま、原発依存から脱して、再生可能エネルギーの比率を高めるために様々な分野で研究や実証実験が活発に行われ始めています。

たとえば、太陽光発電では従来のフラットなパネルをレンズのようにして集光率を高めたらもっと発電量が増えるのではないかと、パネルの温度上昇で発電効率が落ちるのをセラミックなどの特性を生かして温度上昇を抑えることはできないか、現在可視光部分だけを利用して発電しているシステムを紫外線や赤外線部分をも利用することで、発電量や発電効率を高められ

いか…。

どれもわくわくするような希望ある取り組みです。そしてこうした取り組みには、中小企業が大きな役割を果たしているものが数多く存在しています。

また、四方を海に囲まれた日本で、波力、潮力、海上風力などの海のエネルギーを活用しようと、被災地である岩手県を舞台に一大プロジェクトも動き出そうとしています。

それぞれ実用化までにはまだ、さまざまな課題や困難もあるでしょう。しかし、日本経済はつねに直面する課題や困難を乗り越えて発展してきた歴史と経験を持っています。

【ある中小企業のアイデアと挑戦】

都内のある太陽光発電システムの販売・施工会社では他社と共同で、太陽光発電システムと蓄電システムやLEDを組み合わせた独自電源による夜間照明装置を開発し、販売・普及に乗り出しました。今後、公園や公共施設などへの設置、商業・産業施設などへの設置によって、防犯効果はもちろん、災害対応としても役立つのではないかと期待しています。

本業に精を出すかわらで、そのノウハウを活用しながら社会に貢献するアイデアで新しい事業分野や市場を開拓する、その繰り返しの中で中小企業は鍛えられてきました。

【大惨事を教訓に国力を総動員する新しい旗を】

「安全神話」に取りつかれ、取り返しのつかない事故を招いたにもかかわらず、いまだに「神話」の上塗りを繰り返そうという思考停止の異常さは、中小企業をはじめとしたこうした健全な努力と重ね合わせると、時代の害悪として唾棄されるべきでしょう。

冒頭の世論調査でも、政府の原発への「安全」対策にたいして、「あまり信頼していない」52%、「まったく信頼していない」28%（「朝日」調査）と、国民は不信感を募らせています。

むしろ、この大惨事を教訓に、“原発に頼らない日本”という大方針を掲げて、そこに科学技術や経済力などわが国が持つ国力を総動員することこそ、日本経済の新しい発展を促し、世界や日本の未来への真の貢献になるのではないのでしょうか。

民族歌舞団

荒馬座が佐久穂町でお披露目公演

日時：4月22日(日)、場所：佐久穂町立八千穂小学校体育館

NPO法人「八千穂お山の家」の活動拠点提供などで日ごろからご協力をいただいている民族歌舞団「荒馬座」が研修センター（通称「お山の家」）のある長野県佐久穂町で新作「あしたへ向かって」をお披露目する特別公演を行います。3月、雪の中を町役場を訪れ、佐久穂町教育委員会の後援も得て上演の運びとなりました。

佐久穂町は、千曲川上流域に広がる農山村地域。小学校3校、中学校2校と3つの保育園があり、今回は小学校の体育館を借りて、地元の子どもたちはもちろん、大人やお年寄りにも楽しんでもらえる企画です。

3月下旬から約1ヶ月をかけて八千穂センターで仕込み合宿を行い、22日当日を迎えます。

NPO法人「八千穂お山の家」でも、この企画を「都市と地方の交流促進」事業と位置づけ、応援しています。観覧ご希望の方は、「お山の家」事務局まで。観覧無料です。

【問い合わせ】

NPO法人「八千穂お山の家」事務局
電話：03（6383）3045
メール：oyama@k-kconsult.com



大久保佐和子の ママさん弁護士

専断記

第5回

あるクリーニング業者の破産事件を担当した。

従業員100人を抱えた会社で、相談にみえたのは二代目の専務。社長である父は体調を崩し、ここ数年、息子である専務さんが会社を切り盛りしてきた。当初は個人事業として細々と

た。すでに営業を行なっておらず、場内は森閑としていたが、つい最近まで多くの従業員が働いていた息づかいを感じる、そんな工場だった。

めたクリーニング店が、徐々に売り上げを伸ばし、約50年前に会社化して工場も建て、経営は順調に推移してきた。不況の中で多少の浮き沈みはあったものの、堅実な経営で乗り越えてきた。しかし、リーマンショック後、売上が急に落ち込んだ。リスケ（借入金返済計画の見直し）をするなどして経営努力を続け、多少復活の兆しが見えたところ、3・11が起きて頭打ちに。実直なクリーニング業者にまで追いつけなかった。

専務は、打ち合わせのたびに年下の私に「すみません。よろしくお願いします」と頭を深くお祈りします。折り目正しい実直な2代目でしたが、この工場をたたむという決意。どれだけの思いがそこにあるのか、私にはとても受け止めきれぬものではない。病床の社長に会いにいくと、「息子は本当によくやってくれた、息子に申し訳ない…」と涙ながらに訴え、こんな若造の私の手を取って「よろしくお願いします」と頭を下げてくれる。

申立準備の過程で、クリーニング工場を見せていただいた。日常生活の中では見ることでしかない舞台裏のような印象だった。大・中・小様々な機械があり、身近なところでは、アイロン台やハンガーなども目につい

る。弁護士をしていると、いろいろな人の人生の大切な場面に立ち会うことになる。真面目に懸命に働く人が追い込まれるのは本当に辛い。この工場だけでなく、この一家の歴史や思いを感じながらの、忘れられない申立となった。